慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | 十七世紀フランス農村の構成:一つの事例 |
|------------------|---|
| Sub Title | The French peasantry of the seventeenth century : a regional example |
| Author | 渡辺, 國廣 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1961 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.8 (1961. 8) ,p.655(45)- 665(55) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19610801-0045 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610801-0045 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

その理論は独断的なものとなる。相互納得と相互支持のプロセスを通して、主観的な価値判断は客観化され社会的意見とな じめて絶対性を獲得することができるのである。マルキシズムはこの相互納得と相互支持のプロセスをおこなわないとき、 ければ絶対的なものとはなり得ない。有限かつ相対的な個人の価値判断は、他との納得によって支持されたとき、それはは れたものは価値判断そのものではなくして、価値判断につきまとう偏見と独断とであった。このような偏見と独断とはどこれたものは価値判断そのものではなくして、価値判断につきまとう偏見と独断とであった。 ものであるが故に、 から発生するか。それは価値判断を絶対化する(たとえば「自然」という衣をつけて)ことにある。本来個人の価値判断は個人の その正しさを主張できるのである。 よく知られているように、 相対的であり有限なものである。価値判断が有限であるからこそ、それは他との相互支持によってでな 価値判断を主観的であるとしてその排除を主張したが、 ウェーバーが極度に恐

れて えられないことを認めている。 このウェーバーに対する解釈は、山田雄三「価値判断論に関するミュルダー いるように、ミュルダールの変化である。最近のミュルダールは、価値は事実を離れては考えられないし、事実も価値を離れては考このウェーバーに対する解釈は、山田雄三「価値判断論に関するミュルダールの最近の見解について」(「一橋論叢42巻6号)に示さ を否定せず、 それと「主観的趣味判断」との本質的差を認めていたことを結論している。 また小倉志祥「マックス・ウェーバーにおける科学と倫理」においても、ウェーバーが「規範的倫理学の

級の 利益のみを考えて政策をおこなりことはできなくなったと考えるかあるいはこれに反し、 が、それは価値判断論からはずれるので稿を新たにして論じたい。 最後に、私の図式による政府が、 社会的意見を反映した厚生であるか否かについては、 「みせかけの退却」であるというかは、支配者階級がどのようなものかというメカニズムの根拠が示されなければなら 問題はもっと明瞭になるであろう。 いかなるものであり、それが国家とどのような関係に立ち、そして政府のおこなう政策 政府の性格さらに 国家の性格がとりあげられなければならない ただ国家または政府が、 このような政策の変化を支配者階 現代の機構の中では、 一方的な

本稿で述べたプロセスが実際にどのように進展しているかについては、 加藤・丸尾「社会化と経済計画」 (理想社)参照。

十七世紀フランス農村の構成

---- つ の 事 例---

* Annales, 1947, p. 365 所載のフロックの書簡に注意。

** Pierre Goubert, "The French Peasantry of the Seventeenth Century: A Regional Example," Past and Present, No. 10, Nov. 1956, pp. 55-77.

_

渡

辺

國

廣

極々な史料の語るところによれば、農民の手中に残り得た土地は地合体の半分であった。ボヴェーの近郊ではわずか一クォーターといった。 土地の最上の部分は農民の手から離れた。 残った土地は地力に乏しい。また葡萄島、森林、牧草地の大部分を農民はなくして力に乏しい。また葡萄島、森林、牧草地の大部分を農民はなくして力に乏しい。また葡萄島、森林、牧草地の大部分を農民はなくして力に乏しい。 一○ヘクタールを持つほどの者は極端に少数であった。

貸した。保有地を狭められた農民は競ってその賃借を求めた。しかれの集積に懸命な努力を傾けている。農民の保有地は極端に圧縮さ地の集積に懸命な努力を傾けている。農民の保有地は極端に圧縮さ地の集積に懸命な努力を傾けている。農民の保有地は極端に圧縮されらをもって『ファルム』を構成した。この時期には市民もまた土土を重要をある。特権者は集積した土地を自身で耕作しない。農民の保有地を執拗に買戻し、それらをもって『ファルム』を構成した。この時期には市民もまた土地の集積に関係を重要している。

七世紀フランス農村の構成

タールを賃借できただけであった。し大方の者は思うに任せない。大抵は生活の糧の補充に精々三ヘク

後者はその実力において前者に圧倒されていった。 と対しなった。 後は そのことにより 『フェルミエ』 と民がその引受者になった。 しかし彼は 『ファルム』の経営を大規模端に手狭なものであった。しかしこの種の者は村に一人か二人いるだけ。可以上を保有し、どちらかといえばその排作に依存して『ファルム』の賃借に大した関心を示さない『ラブルール』もいた。しかして別受けることによって力を得ていった。 またまれには三〇ヘクタール以上を保有し、どちらかといえばその排作に依存して『ファルム』の賃借に大した関心を示さない『ラブルール』と呼ばれる保有農の賃借に大した関心を示さない『ラブルール』と呼ばれる保有農の賃借に大した関心を示さない『ラブルール』と呼ばれる保有農

- * 若干の例を示せば。ゴワンクールでは保有農民九八人のうちと、一ル、九四人は二ヘクタール以下の規模。エスポーブールの保有農民一四八人中一〇ヘクタールと有する者は絶無、一二五人は二ヘクタール以下。クードレ・サン・ジェルメールでは保有農民一二五人のうち一〇六人が二ヘクタール以下の規模。エスポーブールの保護に二エーカー半。
- ** 保有農民で『マヌヴリエ』と呼ばれる人々の場合。グベル

借したのは『ファルム』でないことに注意。第四節を参照。ない。彼は依然として small proprietor であった。 彼が賃によれば、ボヴェー地方には完全な無産者を見出すことができ

*** 彼はreceveur de seigneurie, fermier-receveur と呼ばれた。第三節の闫の説明に注意。

明に注意。 ordinary で、substantial な存在であった。第三節の臼の説***** グベル氏 によれば、これこそが『ラブルール』として

Ξ

た。 保有農民の一つの極に『ラブルール』がいた。 鋤一、馬二を持てた。 で付会を組織し、十七世紀には村の生活に君臨するまでになっていば彼を『ラブ ルー ル』という。役畜の所有者として彼は『ファルは彼を『ラブ ルー ル』という。役畜の所有者として彼は『ファルス』の経営を容易に引受けることができた。このことによって彼はよって彼は『ファルール』がいた。 鋤一、馬二を持て

所有者として彼は他から土地を賃借できた。馬を利用することによ資したこというまでもない。すでに自明なところであった。役畜のな誇りを感じていた。また馬を持つことが彼の社会的地位の向上にした。また羊二○頭か穀類五五ブッシェルに匹敵するとも い われ頑強な馬一頭の価値は最低六○リーヴル。これは乳牛三頭に相当

ル』は村で依然として少数者的存在であった。 に対し、『ラブルーに従属せしめることになったのである。 しか しこれら『ラブルーが契機となって『ラブルール』は役畜を持たない他の人々を彼の下が契機となって『ラブルール』は役畜を持たない他の人々を彼の下出すという手段もあった。村で大抵の者は馬を持たず、従って耕作出すという手段もあった。村で大抵の者は馬を持たず、従って耕作の。また馬を賃貸に

者、闫、同時に領主権の引受けを考えた者に大別できる。主力を注ぐ者、臼、土地を賃借するということだけに関心を寄せる関説した。ここでさらに深入りすれば。臼、自己の保有地の経営にも種々な区別が存したということであろう。これについてはすでに同時に注意しなければならない点は同じ『ラブルール』のなかに

要な牧草地を持っていた。

一三、羊八五を有す。彼はその飼育に必ない。乳牛三、豚二、羊二三を持つ。彼は自己の保有地の耕作に主力い。乳牛三、豚二、羊二三を持つ。彼は自己の保有地の耕作に主力い。乳牛三、豚二、羊二三を持つ。彼は自己の保有地の耕作に主力に、乳牛三、豚二、羊二三を持つ。彼は自己の保有地の耕作に主力に、乳牛三、豚二、羊二三を持つ。彼の保有地の規模は一〇〇二十八、大阪道、大阪二、

で、地片二ないし三。これらの『ラブルール』は土地の賃借に異常頭。 もう一人の 『ラブルール』 の場合。 彼の保有地は極端に手狭臼について。 彼の保有地は四〇エーカー精々。 乳牛はた だ の三

二〇頭かそれ以上の豚を飼養している。な関心を寄せた。大抵は領主の森林で豚を放牧する権利を獲得してな関心を寄せた。大抵は領主の森林で豚を放牧する権利を獲得して

******* れを売却してし まっ た。 彼の関心は何よりも経営規模の拡大にあ 区の四一家族の負債と合計すれば、彼の債権は一、七〇〇リ ともいわれた。注意すべきは彼が自己の保有地に何ら関心を寄せて またゴワンクールの村人の半数が彼に債務をおうていた。近接の教 で、穀類八、〇〇〇束、葡萄酒と林檎酒で一〇〇樽、羊毛二〇〇俵。 主なもの。ほかに鳩一六〇、家禽一八〇。収穫の余剰も相当なもの いないという点であろう。この種の『ラブルール』で極端な場合そ ていた。これらの代償として彼は年に一、二〇〇リーヴルと最上の 同時に領主権を引受け、十分の一税の徴集に従い、圧搾場を独占し 小麦四〇ヘクトリットルを引渡した。彼は自己の保有地を一〇〇リ ーヴルで賃貸に出した。家畜としては乳牛二五、豚六、羊二二五が 農夫二を抱えていた。また必要に応じて大勢の人足を雇った。彼は これらを彼は教会の依頼で引受けた。彼は馬一二頭を持ち、車曳二、 一〇〇ヘクタール、牧草地一二ヘクタール、大きな葡萄園、森林二、 目は村でもっとも有力な存在であった。ド その限り必要な役畜の充実に彼は腐心している。 ゥメスニの場合。土地 ヴ

い。 ボヴェー地方にはかかる『ラブルール』を見出すことができなた。彼は laboureur à bras と呼ばれた。グベル氏によれば、キーポワトウ地方には『ラブルール』で鋤も馬も持たない者がい

十七世紀フランス農村の構成

ツでは四三人中六人。ラ 農業経営をたえず圧迫していった。それがいかなる事態を結果 ることは彼の念願であった。しかし『ファルム』の拡大は彼の い。彼は売却のための余剰を持ち得た。保有農民として自立す ロンでは七〇人中六人。 めざした。また後述の目の方向をとる者もあった。 したか。この間の事情の究明は今後に譲らなければならない。 若干の例を示そう。 ル』はただの三人。サン ルム』の経営で得たものを保有地の拡大に投じて〇の方向を 『ラブルール』として genuine な存在であった。彼は『フ いわゆる laboureur-fermier. グベル氏によれば、 **『**ラブルー ルウスでは八六人の家持のうち『ラブル 動静に私は最大の関心を寄せた ッセーでは四六人中ただの一人。 イニェでは九〇人中三人。 リ は九三人中一〇人。ク され

あったといっても過言ではなかった。 は『ファルム』を一括して引受け、領主権をも同時に賃借することによって村の旦那と化した。村における『ラブルール』のことによって村の旦那と化した。村における『ラブルール』の

四

抵の村で住民の圧倒的部分を占めていた。その最下層は文字通りの保有農民の他の極には『マヌヴリエ』がいる。この種の人々が大

無産者で、徴税簿では無力者として扱われている。いわば社会の落伍者で、ボヴェー地方では例外的な存在であった。耕地では小麦とラいた。菜園では大麻、甘藍、林檎が栽培された。耕地では小麦とラいた。菜園では大麻、甘藍、林檎が栽培された。耕地では小麦とラいた。菜園では大麻、甘藍、林檎が栽培された。耕地では小麦とラいた。菜園では大麻、甘藍、林檎が栽培された。耕地では小麦とラいた。 従って発育は不良であった。 しかし羊は重要で、『マヌヴリエ』はその毛や肉を売って税金の支払に当てていた。リエ』はその毛や肉を売って税金の支払に当てていた。リエ』はその毛や肉を売って税金の支払に当てていた。リエ』はその毛や肉を売って税金の支払に当てていた。

マヴリエ』は役畜たる馬を持たない。また必要な肥料を獲得するだい。 それをもって前借の返済に当てていた。『マヌヴリエ』は一椀のスープか葡萄情がている。常雇では収穫期に手不足のためであった。仕事は乾草らない。 それをもって前借の返済に当てていた。『マヌヴリエ』は一椀のスープか葡萄のような状況の下で『マヌヴリエ』は生活の維持が不可能であるためにも借務は早急に解消しておく必要があった。仕事は乾草のためにも借務は早急に解消しておく必要があった。仕事は乾草のためにも借務は早急に解消しておく必要があった。仕事は乾草のためにも借務は早急に解消しておく必要があった。仕事は乾草のためにも借務は早急に解消しておく必要があった。仕事は乾草のためにも借務は早急に解消しておく必要があったの前借を期待するだった。彼は借地することによって運命の打解を考えた。しかし『マラブルール』の下で臨時の人足としている。後は信地することによって運命の打解を考えた。しかし『マラブルール』が下でないる。

か。 か。 か。 から地片へ移動することで彼はどれほど消耗したことあった。 世料はかえって高くついた。 不作時にはその支払も不可能 たる。 借地することができない。 零細な規模を賃借する以外になか 規模に借地することができない。 零細な規模を賃借する以外になか けの家畜がない。資本の予備を欠く。従って『マヌヴリエ』には大

れた。にもかかわらず織布が『マヌヴリエ』にとって生活の重要な ていた。 した。これら『マヌヴリエ』は毛織物の仕事にかなり傾斜していた。 たない。すべて商人から前借していた。商人は出来高に応じて引渡 しかし収穫期には人足としての仕事に向い、 く営まれているのに気づく。これら農村の織布者は原料も織機も持 は同時に紡ぎもした。そして糸にしてボヴェーの織布業者に売却し 込まれるかした羊毛を梳いたり靄だてたりしていた。これらの人々 工に従う者があった。また東部や北東部の村人は麻の加工に従って ただし例外としてピカルディ地方の南部や西部には村人で羊毛の加 乏しく、一年のうちもっとも好都合な時期をみて折に触れ従ってい いた。ボヴェー周辺の若干の村ではその界隈で産するか近隣から持 たというだけであった。『マヌヴリエ』は職人として徹底できない。 た。しかし常時これらの仕事を続けることはできない。村で需要が た。彼は樽や車の製造、仕立職、織布に生活の糧を求め よう とし かくて 『マヌヴリエ』 は農業以外に仕事を 求めざるを 得なかっ アミアンやアブヴィルに向って北進すれば織布がかなり広 毛織物の仕事は中断さ

補助となったこというまでもない。

躊躇を感じたのはこの種の人々であった。 園を持っていた。また乾草作り、取入れ、脱穀のため賃労働に出る 向って運び込まれた。これらの『マヌヴリエ』は耕地若干のほか菜 らの『マヌヴリエ』は富裕を誇っていた。また自分の驢馬を利用し る人々、葡萄作りに従う人々、工芸品の作成に従事する人々。 従事する人々である。パリにアザミ、アスパラガス、林檎を供給す こともあった。しかし自身を『マヌヴリエ』と呼ぶことにもっとも て運搬に従事する人々もいた。これによって粉や肉が近くの都市に 雌豚を飼っていた。これら『マヌヴリエ』は極端に貧しくはない 村でかなり多数がこうした『マヌヴリエ』であった。専門に牧養に 帯には葡萄畠が開け、豊かな森林が続いていた。従って総じて家畜 の飼育が容易であり、『マヌヴリエ』は乳牛や六頭の羊を持ち、また い。オワズ川やテラン川に沿って豊かな牧草地があり、 したところと違い、社会階層の明確な単純化がそこでは みられ しかしボヴェーの南の部分では事情がもっと複雑であった。上述 また丘陵地 これ

林檎、卵、チーズを売り、蔓細工や柳細工を作り、麻布を織り、ま乳牛一頭か二頭、羊五頭か六頭、しばしば驢馬一頭を持っていた。所有であった。従ってどの『マヌヴリエ』よりも保有規模が大きい。抵は二〇エーカーの土地で隠元を栽培していた。土地の半分は彼のた。ブレ地方やソワソネ地方で検出される。豆類の生産に従う。大た。ブレ地方やソワソネ地方で検出される。豆類の生産に従う。大た。ブレ地方やソワソネ地方で検出される。豆類の生産に従う。大

T七世紀フランス農村の構成

存在ともいうべきか。る。自分の仕事でかなり多忙なためであった。今日の言葉で万屋的た製材の仕事をしていた。他に賃労働に出ることはかなりまれであ

- て把握していた。 very small proprietor, smallholder, householder とし* この点に注意。グベル氏はボヴェー地方の『マヌヴリェ』を
- ナンリスト、つうスト・FELCとう及うい。アベルモは『マヌとってそれはかなり高貴な称号と感じられていた。* しかしこの種の人々は『ラブルール』とも自称しない。彼に
- munity でもなかったのである。

 *** 村の細民といわるべき存在をどう扱うか。グベル氏は『マヌヴリエ』ということで一括しているが。この取上げ方自体に異として Proletarian でも Prosperous member of com-

五

規模が必要であったかという問題でもあろう。か。裏を返せばこれは自立に要する収穫を得るためどれだけの保有保有農民のうちどれだけの者が自分の収穫で経済的に自立できた

ら二ポンド半としよう。また大抵の農民の家庭が六人からなると考れているところに従って大人一人が一日に必要なパンを二ポンドかな食物の量であった。これをどう見積るか。小麦を規準。普通いわこれと関連して真先に問わるべきは農民家族が日常の生活に必要

必要である。
必要である。
があるでいい。このパンを獲得するためには年間一八キンタルの小麦がち二人は幼児とする。従って一日に必要なパンの量は一〇ポンドとえよう。内訳は両親と子供三人、ほかに祖父または祖母。子供のう

限一三へクタール半ということであった。
限一三へクタール半ということであった。
これと関連しては単位当り収量が問題である。ボウェー地方の最上の土地で産出量は一へクタール、不作時で四へクタール半の保有規模が必要である。しかし当時は三圃制。このため三年に一回の小麦収穫ということになる。従って常時一八キンタルを確保し続けるため必要な規模はその三倍の六へクタール、不作時で四へクタール半分の四キンタルの収穫に必要な保有規模いかんとい限・三へクタール半ということであった。

う。北部ではシャンパールがかなり重く、百東について九東であったらない。収穫の六分の一をそれに当てた。何、最小限二〇リーヴならない。収穫の六分の一をそれに当てた。何、最小限二〇リーヴならない。収穫の六分の一をそれに当てた。何、最小限二〇リーヴならない。収穫の六分の一をそれに当てた。何、最小限二〇リーヴならない。収穫の六分の一をそれに当てた。何、最小限二〇リーヴルのというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでものでは、方は、一つでは、大きに、大きない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでもない。(f)、次の年のための種子を差引かなければいこというまでものでものでは、方は、大きないる。(f)、方は、大きないる。

五エーカー)が必要であった。 他なければならない。経済的な自立を達するためには最小限一二 た。春穀についても同じことがいい得る。従って必要量の二倍は収 た。春穀についても同じことがいい得る。従って必要量の二倍は収 た。代、収穫や脱穀のため臨時に雇った人足に対する賃銀。普通は

リエ』が賃借すべき余地はますます狭められていったのである。後の財産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』はただちにそうした方向を選ばなかった。彼にとって農業で立つということは犬きな魅力である。借地料は通例一へクタールにつき小麦一キンタル半であった。借地により不足の若干は補塡することができた。しかしそうした方向をである。彼の財産により不足の若干は補塡することができた。しかしそうした方向を得られなかった。土地は急速に『ファルム』に組込まれ、『マヌヴリエ』が賃借すべき余地はますます狭められていったのである。彼の財産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』は小麦を他から購産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』は小麦を他から購産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』は小麦を他から購産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』は小麦を他から購産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』は小麦を他から購産は必要規模にはるか及ばない。『マヌヴリエ』は小麦を他から購産は必要規模にはるからにより、まずによりにより、まずによりによりとは、これによりによりによりには、これによりによります。

の『ラブルール』は土地の賃借にすべてを賭けた。彼は役畜の所有どの『ラブルール』は村で一〇人に一人という少数であった。大抵自立が困難であった。最小限の必要規模二七ヘクタールを有するほまた大抵の『ラブルール』も彼の保有地に依存する限り経済的に

上る者もあったという。

おこの時期に無産の寛を強めていく反面において『ラブルーエ』がこの時期に無産の度を強めていく反面において『ラブルーエ』がこの時期に無産の度を強めていく反面において『ラブルーオとしてそうした方向を容易に打出し得たわけである。『マヌヴリ

- 网络拉 E. Labrousse, Esquisse du Mouvement des Prix et des Revenus en France au XVIIIe siècle (2 vols., Paris, 1933); La Crise de l'Economie Française à la Fin de l'Ancien Régime au Début de la Revolution (Paris, 1944) 冷谷眠。
- ** 第二節を参照。
- *** 第二節を参照。第三節の日の型がこれ。
- 型となるべく努めた。もちろん目の型をめざす者もある。を保有地の拡大に投じた。そのことによって彼は第三節の日の**** この種の『ラブルール』は『ファルム』の経営で得たもの
- 補充に関心を寄せる。彼は文字通り企業家であった。***** 第三節の闫の型。この種の『ラブルール』はむしろ役畜の

大*

はもはや自明であろう。領主は自己の地位の維持のため土地を買戻た。それが『ファルム』の設定ということのなかで準備されたこといってみれば十七世紀を通じて社会階層は徐々に単純化していっ

拡大はそうした方向を抑止さえしたのであった。かで耕作農民として自立することの困難は増した。『ファルム』のし、それらをもって『ファルム』を構成した。そしてこの過程のな

耕作農民として立つことは農民たる者の理想であった。『ラブルール』はこの理想に達すべくもっとも近い存在であった。 従ってのである。しかし領主は開放耕地から進んで共同地の蚕食を開始した。そしてこのことにより『ラブルール』が耕作農民として立つこた。そしてこのことにより『ラブルール』が耕作農民として立つこた。そしてこのことにより『ラブルール』が耕作農民として立つことを決定的に困難なものにしてしまった。『ラブルール』の引受者となるとを決定的に困難なものにしてしまった。『ラブルール』の保管の表定的に困難なものにしてしまった。『ラブルール』の保管のある。しかし領主は開放耕地から進んで共同地の蚕食を開始した。そしてこのことにより『ラブルール』が耕作農民として立つことは農民たる者の理想であった。『ラブルール』は特作農民として立つことは農民たる者の理想であった。『ラブルール』は特に農民として立つことは農民たる者の理想であった。『ラブルール』は特に農民として立つことは農民たる者の理想であった。『ラブルール』は特による以外による以外による。

うした状況をうまく利用したのであった。彼は急速に富裕化してい強い尊敬を集めていた。『ラブルール』は『フェルミエ』としてこった。その時期にすでに領主は形骸化している。しかしなおも村でれる。の経営を引受け、同時に村で領主権を行使することを請負っした領主の存命策でもあった。『ラブルール』の若干の者は『ファー七世紀の領主はもはや在地しない。『ファルム』の設定はそう

といわれた。 彼は最大の富者として村の生活でほしいままに振舞っていれる。 彼は最大の富者として村の生活でほしいままに振舞っていいた。『フェルミエ』の存在はこうした領主にとって実に質した。しかし今度は領主が『フェルミエ』たる『ラブルール』に衛生して実力の蓄積をはかった。領主権の請負ということもその蓄積に損主は『ラブルール』に高さして存命をはかろうとしたのであった。かくて借地契約に際に済した。しかし今度は領主は俸給生活者としてその境遇をますますに積まは『ラブルール』に青酷な条件を要求するにいたった。しばそれは『フェルミエ』の経営を破産に導くほどのものであったしばそれは『フェルミエ』の経営を破産に導くほどのものであったといわれた。

を関って努力を重ねて来た『ラブルール』はその保有地について私とで結束するための条件は整っている。そしてこうした対抗関係はとで結束するための条件は整っている。そしてこうした対抗関係はを願って努力を重ねて来た『ラブルール』が反領主ということで結束するための条件は整っている。そしてこうした対抗関係はを確って努力を重ねて来た『ラブルール』はその保有地について所有を確認させ、フランスがいわゆる小農の国として再編される基礎有を確認させ、フランスがいわゆる小農の国として再編される基礎を固めたのであった。

領主が『ファルム』を軸として支配体制を確立しようとしたこ

いっていい。 とはその前後の時期の問題を正しく把握するための要件 と も な ろのにまで高められていった。従って十七世紀について理解を得るこの比発点としての現象がフランスでは十七世紀を通じて本格的なもの出発点としての現象がフランスでは十七世紀を通じて本格的なもと。後の発展の出発点はすべてそこに帰せられるといっていい。こ

- ついての私の試論である。というのではない。グベル氏の十七世紀論を踏まえた上でフランスらのではない。グベル氏の十七世紀論を踏まえた上でフランス・以下はグベル氏の論文をまったく離れる。しかし無関係とい
- ** 叙上の展開がフランス全土にわたって起らなかったこと明白** 叙上の展開がフランス全土にわたって起らなかったこと明白の影響を受けること大であった。 領主はこの時期に官職保持者として窮乏化し、『フの影響を受けること大であった。

七

可能である。 領主は村を 離れ、 それにかわる 新勢力の登場であっていった。領主権をも同時に請負う『ラブルール』においてそれが周知の如く『ラブルール』は村の生活で領主の地位にまで上昇し

た。具体的な発生の経緯はどうか。三つの時期に大別できよう。た。具体的な発生の経緯はどうか。三つの時期に大別できよう。た。また一六二四年から一六三四年の間に都市の毛織物生産は最高た。また一六二四年から一六三四年の間に都市の毛織物生産は最高には増大の傾向を示していた。一六二〇年から一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口は疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口は疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口は疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口は疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口は疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口は疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われたが、人口の増勢はこれにより何の影響も受けなかったのであったといっていたとは思えない。人口も全体としてこの時期には増大の傾向を示していたとは思えない。人口も全体としてこの時期には増大の傾向を示していた。一六二〇年から一六三〇年の間には疫病が頻発し、一六三〇年には極度の不作に見舞われることができたのい。そうしたなかで農村もまた最悪の状態を免れることができたのい。そうしたなかで農村もまた最悪の状態を免れることができたのい。そうしたなかでは、

近接の諸地方ではそれが頻発していることに注意。一例としてノルとは断念しなければならない。三つないし四つに分割して『ラブルール』がいた。 彼はかなり富裕で、『フェルミエ』となるべきの経営に苦慮したほどであった。もはやそれを一括して賃貸することは断念しなければならない。三つないし四つに分割して『ラブルール』がいた。 彼はかなり富裕で、『フェルミエ』となるべきずルール』がいた。 彼はかなり富裕で、『フェルミエ』となるべきずをであった。しかし彼らによる反抗というものはみられなかった。 とは断念しなければならない。三つないし四つに分割して『ラブルール』は相当の蓄財をしていた。一方には富める少数の『ラ『ラブルール』は相当の蓄財をしていた。一方には富める少数の『ラップルール』は相当の蓄財をしていることに注意。一例としてノルとは断念したができた。大抵の現代の下層の者に質賞していることに注意。一例としてノルール』の下層の者に質賞していることに注意のであった。大抵のはないというない。

十七世紀フランス農村の構成

らないこともはや自明であろう。 状態を免れることができたのであった。社会の諸階層の単純化が起 マンディ。経済は全般に安定していた。農民層は全体として貧困な

財政危機。それらが第二期を特徴づける。農村の受けた損害は大。 このような大勢から免れることができなかった。かなりの損害が出 とりわけアルサスやロレーヌではなはだしかった。ボヴェー地方も なり確実なことがいい得る。周知の如く戦争の断続。これがための 第二期は一六三五年から一六六○年まで。史料も豊富であり、か

たことのなかで農民は彼の保有地を放棄することを余儀 なく され 農業が不況に見舞われただけではない。毛織物生産も停滞に陥って 弊は一六四九年と一六五一年においてとくに苛烈であった。しかし 貧困は募り、彼らの間で死亡が増大した。出生は減じた。農村の疲 返した。それでいてアルサスやロレーヌと比較すれば損害はよほど 火を避けて移動した。ボヴェーの市壁の内部はこれら難民でごった より若干の村が焼払われてしまった。収穫は略奪された。農民は戦 いる。ボヴェー地方はこの時期に未曽有の混乱を経験した。そうし 情は一変した。ボヴェー地方ではそれに天候の不順が重なり状態は に軽微であった。従って一六四七年までは高物価が続く。借地料も 一段と不幸なものになっていった。農民は非常な生活苦に陥った。 上昇した。また人口の増勢が続く。しかしフロンドの乱の突発で事 一六三六年にボヴェー地方はスペイン軍の侵攻を受けた。これに

た。農民は借務に苦しみ、保有地を明渡したのであった。

獲得することができた。しばしば数百ヘクタールを集積した。 農民からの保有地の収奪は募るばかりであったのである。 地に対する執着をますます深めていった。従ってこの新領主の下で り大した尊敬を集めることができなかった。彼は土地所有を増加す 族の称号を獲得することによって新領主として農民に対するにいた に領主権を購入する者もあった。彼は旧領主にかわって登場し、貴 ることによってこの不名誉が挽回できると信じた。かくして彼は土 ったのであった。しかし結局において彼は成上り者であり、その限 このことはボヴェーの市民にとって幸いした。彼は容易に土地を

倍という穀物価格の上昇を利用して彼は巨大な利益を得ていった。 ら『ラブルール』は一般に『農村のブルジョワジー』と呼ばれた。 あった。耕作農民として自立を願う人々である。また他の者は役畜 これら『ラブルール』のなかにはそれを保有地の拡大に投ずる者も 階層間に明確な単純化が始まっているといわなければならない。 に対したのであった。一六四七年から一六五三年の間には農村の諸 農村社会の最高に位置し、 の購入に投ずることによって生産手段を増し、領主の土地を大規模 ルール』もこの時期にはかなりの繁栄を示すことができた。最高四 また保有地の耕作により売却すべき剰余の得られるほどの『ラブ しようとした。いわゆる『フェルミエ』の登場である。これ 『ラブルール』の下層や『マヌヴリエ』

第三期は一六六〇年から一七三〇年まで。

徐々に低下していった。コルベールの初期の時代を除けば農村にお いて大であった。またこの時期には貨幣の価値が下落している。 ける税の負担は一段と重くなっている。とくに一六九〇年以降にお 死亡率を示していた。死亡は例年の三倍から四倍に達した。出生も 期には物価が下落していった。所得も減退した。程度の差は認めら た。二〇年後の成年人口を危険に追込むほどの打撃であった。一六 毛織物の生産も減退した。 一六六一年の不作で人口は打撃 を 受け 一六九一年から九四年まで、一七〇九年から一〇年までの間に高い 八〇年から一六九〇年の一〇年間を除いて人口は滅少し、とりわけ しかし全体として物価も所得も下落の傾向にあった。同様に

況に追込まれていった。保有地を奪われ、ほとんど無産者化してい の破局的上昇が起った。農民の負債は募るばかりであった。かくて にボーヴァンの筆に注意。さらに一六九四年と一七一〇年には物価 追込まれてしまった。当時の論者エヴァンやボワギュベール、とく の調査を基礎として農民に対する要求を一段と増大していった。ル 起った。彼は新領主として土地の調査に着手した。そして領主はこ の領主で残り得た者もこの時期を最後に完全に没落してしまった。 イ十四世の治下において農村で所得は減少し、農民は悲惨な状況に ルイ十四世の治世の下でボヴェー地方の農民の大部分は不幸な状 とりわけ重要な影響は市民出身者が領主として登場したことから しかし他面において富裕な『ラブルール』が出現するにいたっ カーの土地が新領主に帰することになったのである。

> として君臨していた。 土地の経営担当者であり、しばしば領主権の行使を請負い、特権者 の最高実力者にまで成上ったのである。彼は新領主が村で集積した た。彼は『フェルミエ』として経済的実力の拡充に成功したのであ た。『ラブルール』は『フェルミエ』となることで富裕化し、

存する領主となった。市民もまた商工業で得たものを土地に投じ、 領主にならい『ファルム』を設定した。その一部の者は中小の領主 ランス革命を戦わしめるにいたったのであった。 領主は『ファルム』の拡大のなかで自営をめざす『ラブルール』の ブルール』を『フェルミエ』として彼の下に従属させる。 が生れる。これら『ラブルール』の不満が領主制の打破としてのフ 企図を圧迫した。ここに領主に対するこの種『ラブルール』の緊張 エルミエ』にしながら所領の経営にあたったのである。領主は『ラ こうした新領主を軸に展開をみた。新領主は『ラブルール』を『フ から領主権を購入し、みずから領主になった。十七世紀の農業史は 従来の領主。それらのなかの有力者は『ファルム』の借地料に依 他方この

る時期はない。 グベル氏によれば、フランス史でこの時期以上に再検を要す その結果はおそらく驚くべきものであ